

日本語の伝聞形式と話法

——日本語学習者の習得し難い点——

栗山昌子

1. はじめに

中級・上級レベルの日本語学習者の日本語に接する度に、日常のコミュニケーションには全く支障がなく、文構造や語彙面にも特に問題はないが、日本語としては何となく不自然で、稚拙な印象を受けることがある。中・上級学習者一般の到達目標は「日本語を流暢に話せたり、書いたりできるようになること」である。彼らの中には、語彙数も多く、その意味、用法ともかなりの確で、時には高尚な慣用句等を駆使し、母語話者を驚嘆させることもある。しかし、そうであればあるほど、ある種の用法が不完全であったり不自然であれば、その点が妙に目立ち全体の流れを滞らせることになり、流暢さに欠くと言う評価がなされる。筆者は、日本語使用において通常のコミュニケーションでは不自由のない中級学習者のインタビュープロジェクトを担当した。その際に、彼らのインタビュー事後報告を聞き、第三者が述べた事柄を報告するにあたり、その伝聞の形式、つまり「話法」の様式が固定化しており不自然であることに気がついた。日本語の学習段階では、人から聞いたこと、その内容を相手に伝える形式は「伝聞」として、初級教科書の学習項目に含まれている。ただ教科書にはごく一般的な形式、つまり「～だそうです」という形（広くは「ようだ」「らしい」も含む場合がある）と「～と言いました」という話法の項目を学習するに留まっている。しかし日本語の談話の中にはさまざまな伝聞形式があり、それを母語話者は巧みに駆使して言語活動を行っている。英文法では、「話法」として直接話法と間接話法があり、前者は聞いた内容を情報源の話し手の言葉通りに述べる言い方で、後者は話し手の立場から見て言う言い方である。後者には人称、テンス、時や場所の

表現に変換が要求されるという文法上の規則がある。しかし、日本語においてはその両者の区別が必ずしも明確ではない。例えば、次は放送記者のインタビューに答える政治評論家の例である。(RKB 毎日「政治の見方」'01, 8, 8)

- (1) いろんな形で日本の外交感覚はおかしいぞ、という形でバッシングが来るのが予想されますよね。
- (2) 日本の政治は大変革の時にあると言うので、そっちの方に集中するエネルギーが削がれてしまうんじゃないかとね、山崎さんあたりが言っていますよね。
- (3) 加藤さんだって絶対15日は避けてくれって言ってるけどね。

ラジオ放送なので表記面で引用符が付けられないという不利な点があるが、(1)(2)(3)とも直接に聞いたことをそのまま伝えているので、一応、直接話法と解釈できる。「外交感覚はおかしいぞ」の終助詞の「ぞ」は間接引用にはできにくい部分であり、話し手が言った言葉をそのまま引用しているので直接話法と理解される。(2)の「エネルギーが削がれてしまうんじゃないか」も文末の「じゃないか」という疑問詞から見ると直接話法と考えられる。間接話法にすれば、「山崎さんはエネルギーが削がれてしまうんじゃないかと不安に思った」すべきであろう。しかし、その前文の「日本の政治は大変革の時にあると言うので」は誰の言葉であろうか、後文を導くための伝達者の解釈もとれる。とすれば、この部分は間接話法だとも考えられ、文全体は直接・間接の混合文とも言える。(3)の「避けてくれ」は間接話法では「避けるように頼んだ」となる。このように日本語の伝聞形式には一応の間接・直接の話法の区別があるように見えるがその区別は厳密ではない。

「伝聞」とは、ある事態について、自分は直接知らないが、他から伝え聞いたということを相手に伝える言い方である。その情報源は特定の人でもよいし、漠然と不特定の人、世間というようなものでもよい。

日本語には、固有の伝聞の助動詞「そうだ」がある。「そうだ」は「名詞+だ」とその他すべての述語の終止形につくが、命令、意向、疑問等の形には

つかないという制限がある。従って、上記(2)の前半はよいが、後半の部分「エネルギーが削がれてしまうんじゃないか」を「そうだ」で置き換えることはできない。例えば、次のようなおかしい文になる。「日本の政治は大変革の時にあるそうで、山崎さんあたりによると、そっちの方に集中するエネルギーが削がれてしまうんじゃないかそうだ」

一方、「と言う」の話法の形式には制限がない。しかも、直接話法と間接話法の両方ともに使えるため直接言ったことの引用なのか、話し手の立場から見ても言い直した言い方なのか、両者の区別がはっきりしない。引用符の使い方においても英文法とは異なり、直接言った事を引用する場合でも次のように引用符が使われない場合もある。

(4) 本格的な治療をしなくても、9割はこれで元に戻ると言う。朝日 9/3

上記(4)は、医者が話した内容の中の一文であるが、引用文には引用符がついていない。

学習者に的確な日本語指導を行うためには、先ず、通常良く使われている日本語の表現形式を知り、学習者の誤用及び非用を取り上げて学習し難い点を解明し、分析する必要がある。本論では上記の過程をふまえて、まず日本語の伝聞形式、つまり「話法」について考察していく。

2. 伝聞および話法について

2-1 「そうだ」

「そうだ」は日本語教育辞典によると、話者がある事柄を他から聞いて、あるいは読んで知ったという意を表わす「伝聞」の表現形式として、聞いた内容の後に「そうだ」を付けて表わすとし、次の例が示されている。(注1)

- ①彼は銀行員だそうだ。(名詞+だ) ()内は接続の形を表わす。
- ②今年の野菜は高いそうだ。(形容詞普通形)
- ③チンさんは帰国するそうだ。(動詞普通形)

④チンさんは来ないそうだ。(動詞の否定形)

⑤何か話したいことがあるそうで、今晩会うことになっています。

また、聞いた事柄の出所を示す場合には、聞いた内容の前に「…によると(…によれば)」「聞いたところでは(…に聞くと)」等のような言い方をおく。

⑥林さんの話しでは、試験は2日間だそうだ。

寺村(1984)は、伝聞の「そうだ」は、他から聞いた事を伝えると言っても、誰か特定の人が、ある特定の時に、特定の場所で実際に口に出して言った、そのことを伝えようとする表現ではないので、「言った」主体をはっきりさせる必要がある時には「そうだ」は使えない、としている。つまり、「…そうだ」は、「…」の部分の内容を、自分が聞いたこととして、それを現在、相手に価値ある情報として伝えようとするものである。「…」のような内容を、自分は直接は知らない、従って確信的に言い切ることはできないが、他から自分が聞いた情報として、そのことを、多分相手は興味を持って聞くだらうと期待して言う表現である、と述べている。(注2)

次は、日本語の教科書による「…そうだ」の項目の例文である。

文型1. 天気予報によると、あしたは寒くなるそうです。

例文1. 新聞で読んだんですが、1月に日本語のスピーチ大会があるそうですよ。ミラーさんも出てみませんか。

2. クララさんは、子どものときフランスに住んでいたそうですよ。…それでフランス語も分かるんですね。

3. パワー電気の新しい電子辞書はとても使いやすくて、いいそうですよ。

…ええ。わたしはもう買いました。

4. この間インドネシアのバリ島へ遊びに行ってきた。

…とてもきれいな所だそうですね。

『みんなの日本語II 47課』

また、談話練習の部分では、練習のために次のような会話が設定してある。

1. A: 小川さんが、課長になったそうですよ。

B: ほんとですか。いつですか。

A：4月1日だそうです。

B：じゃ、お祝いをしないと…。

2. A：けさのラジオ聞きましたか。

B：いいえ。何かあったんですか。

A：カリフォルニアで火事があったそうですよ。

B：ほんとですか。こわいですね。

上記の教科書の例文等に見られるように、「…そうだ」に関しては、自分が得た情報を客観的に捉えるのではなく、自分の立場を積極的に発話の中に取り入れて相手に情報を伝えようとするムードが見られる。

次は教科書 IMJ (An Introduction to Modern Japanese) の Lesson 16 に取り扱われた例であるが同様なことが言える。

石田：ゆうべはたいへんでしたね。近所で火事があったそうですね。

中村：ええ。夜中の三時ごろでしたからびっくりしました。

………

石田：そうですか。でも、こわかったでしょう。

中村：ええ。家が三軒やけてしまいました。数千万円の被害だそうです。

石田：原因は何だったんですか。

中村：電気ストーブをつけたままねてしまったんだそうです。

2-2 「…と言う」

「伝聞」の表現形式には「そうだ」の他に「と言う」が使われる。「と言う」は「そうだ」に対して、他の人がある場面で言ったこと、つまりその発話内容を、その場での聞き手が事実として客観的に報告する場合に使う言い方であり、「と言う」の他に、「と言った」「と言っている」という表現を使う。これは一般に「話法」または「引用」として扱われている。また、その他「とか」「と聞いている」「だって」などがある。「話法」に関しては日本語教育辞典に次のような例があげられている。(注3)

①彼はアメリカへ行くということです。(いくとのことです)

②今年に入梅が早いと言う。

③損害は約3億と伝えられる。

④ここからは隣の県だと聞いている。

⑤彼は心理学科を希望していると。

⑥学童の体力は低下しているとか。

⑦一行は無事目的地へ到着の由。

⑧あの人，結婚するんだって。

⑤⑥⑦は書き言葉として，⑧は，くだけた言い方として話し言葉に用いる。

⑨聞くところによると，彼は相当な怠け者だという。

⑩新聞によると，また，公共料金が上がるとか。

聞いた内容の前に⑨⑩のように聞いた事柄の出所を示す語句をつけたりする。「と言う」は人の言った事を直接または間接的に引用して述べる言い方であるが，依頼や命令文を間接的に引用する場合は「…ように言う」となる。

⑪A：先生は生徒に帰途は十分注意するように言った。

B：先生は生徒に「帰りは十分に注意しなさい」と言った。

⑫A：生徒は先生にもう少し詳しく説明してくれるように頼んだ。

B：生徒は先生に「もう少し詳しく説明してください」と頼んだ。

⑪⑫ともAは間接的引用でBは直接的引用である。

新聞や文章の言葉では「と言う」の使用が見られるが，実際の会話には「と言っている」の形の方が多く使われている。(注4)

①山下さんはその企画を少し待ってくれと言っている。

②天気予報では明日は雨だと言っている。

③彼は今後の見通しについて何と言っていますか。

④私は厭だと言っているのに承知してくれそうにない。

「と言う」「と言った」に対して「と言っている」は，ある人の発言が現在も有効であることを表わしている。上記①の「山下さんはその企画を待ってくれと言いました」とすれば，過去の時点のみに焦点を当てていることになる。②においても「明日は雨だと言った」と断言するのではなく，「雨だと言っている」の方が聞き手も話し手も現在の時点でもその言葉が現実として意識の内に捉えられているのが分かる。④では，私が「厭だ」と言ったのは過去のある時点であるが，「言っている」と現在の気持ちをも表わしており，自分

の発言の場合は、それが聞き入れてもらえないという状況があるのが普通である。

教科書では「そうだ」の項目は、前述の教科書の初級後半（47課）で学習し、「と言う」に関しては初級前半の段階（21課）で紹介されている。

文型2. 首相は来月アメリカへ行くと言いました。

例文6. 食事のまえにお祈りをしますか。

…いいえ、しませんが「いただきます」と言います。

7. 会議で何か意見を言いましたか。

…はい。むだなコピーが多いと言いました。

『みんなの日本語初級 I 21 課』

この教科書では「…と言います」に関しては、特に練習問題も無く接続の形の文型練習のみで、あとは「…と思います」の練習に重点を置いている。これは「…と言います／…と言いました」という日本語の使われる場面が、実際にはかなり限定されているということにもよると思われる。「○○が××と言いました」という表現はかなり具体的、客観的であり、話者の心情や意思などが全く入っていない、突き放した言い方で通常の会話の中で使われる日本語には馴染まないのかもしれない。森田（1995）は「日本語は事態を突き放して、外から傍観する態度でものを見ない。事態の中に入って自らの目で事態と自分の関係を見ようとする」と述べている。（注5）

日本語の特徴として、話者は発話する時点において、自分の発した言葉の持つ言語行動、または自分の感情を聞き手に共有してくれること期待している。しかし「～と言います」は、単に事実を述べるに留まっており、その発話に対して聞き手側は何も期待されていない。例えば、上記7の『「いただきます」と言います』などや、「先生は何と言いましたか」という質問に対する答えとして「明日来なさい」と言いました、のように特殊な場面に限定されている。

2-3 「話法」

「話法」の定義としては「思考や発言を引用する際の表現方法」と言う説明が一般的であるが、では「引用」とは何を言うのかについては、はっきりした説明がなされていない。「話法」とは、西欧語研究上での文法概念であって、一般に直接話法と間接話法に分けられてはいるが、日本語ではその区別が必ずしも明確でないと言うのが定説である。この傾向は特に話し言葉において顕著である。何故なら、日本語の書き言葉では、直接話法の場合多くは引用文を引用符で囲むという表記面での一応の区別がある。しかし、話し言葉では引用符が表面に現れない。しかもいずれも話し手の発話内容を「と」で受ける。ただし、日本語の直説話法と間接話法の違いは一概に引用符の有無では判断できない。砂川（1998）は、日本語では直接話法と間接話法の区別が必ずしも明確でないのは、「と」という助詞の形式が直説話法にも間接話法にも用いられることに起因している」と述べている。（注6）しかし、直接・間接話法の区別の不明確さの原因は、「と」の使用や時制の一致がないという形式上の問題だけでは解明しない。それよりも話者の発言の内容を聞いた伝達者が状況判断で引用文をどう受け止めているかを表明する述部動詞の働きに起因していると言ってもよいのではないだろうか。

直接話法とは、発話の内容をその主体の立場に即して発話されたままの形で引用することである。間接話法は、発話の内容を文の話し手（伝達者）が自らの立場に即して再構成して引用するものである。その引用内容を伝える話者の内容の解釈や命題の判断によって引用伝達を担う動詞の部分が「言う」に代わってさまざまな述部動詞によって表現されている。（注7）ということは、つまり、伝達者が引用部分の発言内容をどのように理解したかによって引用動詞の選択が伝達者自身によってなされているわけであるから、引用動詞が表わす内容には、伝達者の解釈が含まれているということになる。このように「と」に後続する引用動詞には伝達者の心情や受け止め方が大いに関係していると言う点では、むしろ述部となる引用動詞によって直説法と間接話法の区別が決定されると言うてもよい。

2-4 「と」

助詞の「と」は、前述の「と言う」の形で語や引用文などを受けて伝聞の役割を果たすが、また、その他に「と思って…」等の形式で以下の例のように後続の動詞の示す動作の意図や心理状態を表わす。

- ①明日は5時に起きようと目覚ましをかけた。
- ②友達に会おうと思って電話をした。

「…と」に導かれる引用文には、大きく分けて発言を引用するものと思考を引用するものの2つのタイプがある。「と言う」「と話す」は前者で「と思う」「と考える」は後者であるが、本論ではもともとインタビュープロジェクトによるインタビューの結果の報告を資料としている。従ってインタビューに答えた人の意見を報告するという点では、発言の引用であるため前者「…と言う」の部類に限る。ここで扱うのは、引用文と述部動詞が結びついて全体として一つの文を構成しているものについてであり、特に引用文とそれを直接受けている述部動詞との結びつき及びその使われ方について焦点を当て、資料をもとに考察していく。

2-5 資料

伝達の形式として実際に使われている事例を資料とする。

1. 新聞の報道文 朝日新聞朝刊・夕刊 2001年8月9日
2. ラジオ放送 NHK・RKB・KBC 2001年8月9日
3. 中級レベルの学習者によるインタビュー報告における引用文の事例
九州大学留学生センター中級集中コース受講者7名1996年

話し手によって発話がなされた場面を第一場面とし、第一場面での聞き手が発話内容を別の場面で再構成して第三者に伝える、この別の場面を第二場面とする。第一場面の聞き手で、第二場面では話し手となって発話内容を伝達する者を伝達者とし、発話内容を引用文とする。伝聞を伝える文全体を伝達文とする。

3. 実際の伝達文に見られる例と分析

3-1 新聞報道の場合

新聞に掲載されている記事は多種に渡り、そのスタイルは政治欄、経済欄、家庭欄、その他三面記事等によって異なり、それぞれの欄では報道のし方に特徴がある。各欄によって多少の違いは見られるが、他の人が言ったことを伝えるという伝達の形式には共通点があり、次のように分けられる。

- 1) 「そうだ」は新聞の報道では使われない。発話者の特定の明示が報道関係の記事では常に必要とされている。
- 2) 引用符の後に「と」をつけて引用動詞を述語とする。引用動詞には、さまざまな動詞が使われている。
- 3) 引用符のみで終わる。この場合は話し手が前述されている。

一般に小説などでは、2人または3人などの会話は引用符のみで、その前後関係や筋の流れから話している人物が想像できるので問題はない。シナリオ等もその典型的なものであるが、新聞記事の中にも記者会見を含み、次のようなものもある。発話者は必ず明示してある。

- (5) 市自動車対策課は「排ガス対策に決定打がないからこそ、実現可能なことはやる」
- (6) 暗部がどんどん明るみに出ていると言うジレンマが外務省を襲っている。「必要な改革の全体像から見れば氷山の一角にすぎない」
- (7) 満員の応援席では、父清美さんが「息子に会ったら、良くやったと言ってやりたい。感謝してます」

本論3. では、2) に該当する引用文を取り上げて述語にどのような動詞が使われているのか検討する。

新聞記事の中で見られる「と」に続く代表的な引用動詞は、「言う」「話す」「述べる」「語る」の4語である。

「言う」

- (8) 協会の小林さんは「…残念な事だが、時代のニーズには逆らえない」

と言う。

- (9) アユたちは「10年早いぞ」と言っているような気がした。
- (10) 上司に「映画を見るのも仕事のうちだよ」なんて言われまして。

「話す」

- (10) 「前向きの生き方を見つけられる場を作りたい」と話す。
- (11) Hは取材に対して「私の立場では、今はコメントすることはできない」と話している。
- (12) 監督は「やっぱり甲子園は夏ですね。選手の姿を見てジーンとききました」と話した。

「述べる」

- (14) 小泉首相は挨拶で「国際社会の先頭に立ち、核兵器の廃絶と恒久平和の実現に向けて全力で取り組んで行く」と述べた。
- (15) [見直しが必要だ]と述べ、現体制を支える法律の改定への意欲を示唆した。
- (16) 記者会見で「国際社会に加わる歴史的な段階にいる」と述べ、NATO加盟に向けての意欲を強調した。

「語る」

- (17) バウチャー報道官は「テロの恐れがあるとの情報を得た」と語った。
- (18) Aさんは「現代では失われた豊かな表情がある」と作品の魅力を語る。
- (19) 「共通の財産である楽曲を守りたい」Tさんは著作権に関心を持った理由をこう語る。

上記の動詞は引用の内容をそのまま中立の立場で述べるものである。つまり、ある人が話した内容を聞いて伝達者が聞き手に対してその内容をそのまま伝達しているのであって、ここには伝達者の主観や心情は関与していない。公平で正確な伝達形式での報道文である。それを示しているのは使用されている「言う、話す、述べる、語る」等の引用動詞の種類だと言える。

以下は引用動詞として使われる場合の意味の『似た言葉使い分け辞典』による分類である。(注8)

「言う」基本的には思ったことを言葉で表現する意で、広く使われている。

口で言うのは普通だが、時には書き言葉についても言う。

「話す」1語や2語の短い場合には使わない。ある程度まとまった内容を持つ引用文に使う。

「語る」「話す」よりも文章語的で、内容的にも「話す」ことより改まったまとまりのあることに限られることが多い。自分の行為には使わない。

「述べる」「話す」のやや改まった言い方で「語る」ほど改まった感じではなく、文章で表わす場合にも使う。自分が述べる場合も使う。述べ立てと言う発話内行為を特定するもので、無意味語を受けることはできない。

上記4語の基本的な使い分けは、「言う」は思った事を言葉で表現する意で、広く使われており、(8)のようにまとまった内容を受けるだけではなく、(9)の「10年早いぞ」や彼女は「あれっ」と言った等、反射的に小さな叫び声をあげるような場合やドアが「バタン」と言って閉まった等の音の表現のように何の発話力も持たない無意味語や無意味な音声の連なりをも受けることができる。このように如何なる文をも引用文として受ける事ができ、発話の内容には無関心の動詞である。「話す」は1語や2語の短い言葉には使わず、ある程度まとまった内容に使い、ある事について誰かと相談したり、討議したりする場合も使う。「10年早いぞと話した」や「彼女は『あれっ』と話した」等とは言えない。「ご両親はあなたが日本へ行きたいと言った時に何と話しましたか」という学習者の誤用に出会ったことがあるが、「何」は内容を持たない語であるため「何と言いましたか」となる。ただ「何を話したか」または「何について話したか」という内容を尋ねる場合には可能である。「語る」は「昔を語る」や「真相を語る」のように「話す」より文章語的で、内容的にも改まった、まとまりのある事に限られる事が多い。「述べる」は「話す」のやや改まった言い方で、「語る」ほど改まった感じではない。ニュースの報道等に使われる。

上記の4語の他には、例えば「言い切る」や「言い張る」などのように結合の後部に伝達者の意が導入されている複合動詞や「叫ぶ」「ささやく」「どなる」等のいわゆる言語・表現・報知の部類に属する動詞と談話・問答の部

類に属する動詞が使われている。(注9) その他、実際にはほとんど制限なくさまざまな動詞が引用の述部動詞として使用されている。これらの動詞は言語行動とも結びついており、その動詞の意味は引用文の内容を表明したり、その内容によって起こされた言動で、その言葉が発せられた状況とともに伝えるものである。例えば、朝日新聞夕刊(200年9月8日)の中の「と」に続く引用動詞を分類してみると、全体数46動詞の中の約半数の25動詞は「言う」「話す」「述べる」「語る」であったが、その他は次のような「と」に続く述部動詞が使用されている。「懸念が強まった」、「悲観的な見方が大勢となっている」、「2人の意見が一致」「建設的な提案をしている」、「苦笑するほどの熱の入れ方である」、「呼ばせていただく」「口を揃えた」、「関心を示した」、「考えた」、「自信をみせた」、「とする」等である。

3-2 引用述部動詞の分類

今回の資料から分ったことは、引用文を導く述部動詞は大きく3種に分けられるということである。1つは伝達者が引用文の内容に無関心の中立的な立場でそのまま伝達する場合の引用動詞である。次は伝達者が引用内容に関心を持ち、その発話内行為がどのような種別に属するかを判断し、その場の状況を何らかの形で述部動詞に反映させているものである。第3番目には、述部動詞が引用文の内容とは直接的には関係のない独立した動作や事柄を表わしているものである。

3-2-1 一般引用動詞

引用文の表わす事柄をそのまま伝える機能を持つ動詞で、伝達者は引用文の内容には関与していない中立的な動詞である。これを一般引用動詞とする。一般引用動詞は前出の例文(8)から(19)の「言う」「話す」「述べる」「語る」であり、この中で最も代表的なものは「言う」である。また、新聞記事には「言及」という語も使われている。

(20) 「超核大国の中には核軍縮の国際的約束ごとを一方的に破棄しようとする態度がみられる」と言及。

(21) 児童の一人は「考え直したい」と感想を述べた。

直接話法と間接話法の区別が曖昧な日本語の例は(21)にも見られる。「述べた」では直説法であると理解できるが、「感想を述べた」では伝達者の注解が入り、間接的な意味あいを含む伝達法とも言える。

3-2-2 内容関与型引用動詞

述部動詞が引用内容の意図をより明確にしたり、補足説明を加えたりする役割を果たしている動詞である。引用文の再現する発言や思考がどのような言語行為を遂行するものであるかを、述部動詞が特定しており、その事によって引用された発言や思考に対する伝達者の解釈が加えられている。この種の引用を導く述部動詞は次のように分類される。

3-2-2-1 行為指示・内容補足型

引用文の内容が述部動詞によって代弁されており、聞き手または読み手に対して具体的な説明が加えられている行為指示型の動詞である。「頼む」「命令する」「願う」「主張する」「指示する」等の動詞や、「説明する」のように引用内容を具体的に補足説明している動詞である。これは伝達者の引用文の受け止め方が投入されており、引用述部動詞が引用内容を規定していると言うことができる。つまり引用内容の要約を引用動詞が行っているのである。

- (22) 教授に尋ねると「学生に教えておけ」と指示した。
- (23) 「参加児童数が少なくて隔年で実施したい」との申し入れがあった。
- (24) 「上映許可を得ていない」として、市に上映中止を求めている。
- (25) 学生たちに「笑いを活用できる看護婦になれ」と勧めている。
- (26) 「何言ってるの」とたしなめることもあった。
- (27) H議長は「……核廃絶に真っ直ぐ向かうのは難しい」と政府の立場を弁明した。
- (28) 市長は平和宣言の中で20世紀を「核兵器と言う人類の絶滅兵器を生み出した世紀だった」と総括。
- (29) 「彼女のサーブが読めなかった」とヒギンズも完敗を認めるしかなかった。

- (30) 「どの国も安全保障の主ラインを自立的に選ぶ権利がある」とロシアの考えに左右されない考えを明らかにした。
- (31) 「保険料の負担水準を固定してしまっただろうか」と大人達ができなかった建設的な提案をしている。
- (32) 「安易にごみを燃やすのは良くない」と分かりやすく説明する。
- (33) 「核兵器をなくそうとする努力を無にしようとするもので、強く反対する」と抗議の姿勢を表明した。
- (34) 「移植したい時に直ぐ使えるのも便利」と利点を説明する。
- (35) 「見直しが必要だ」と自らの改革路線を指示していることを強調した。

3-2-2-2 外的様態説明型

次に、「怒鳴る」「まくしたてる」「ささやく」「言い切る」等発話時の様態を表わす動詞を引用述部動詞に持つものである。引用文が発話時にどのようなようすで発話されたかということを伝達者が聞き手に伝達者の解釈で説明しているとも言える。

- (36) 理事長に「こんなのではだめだ」と怒鳴られた。
- (37) 「我々を代表で出すようでは駄目だ」とまくし立てた。
- (38) 「この会議で決まったんだ」とささやく。
- (39) 「大魚だにっ」とだれかが叫ぶ。
- (40) 「腕を振るって堂々に行くぞ」とH主将が他の選手に呼びかけた。
- (41) 「残ってくれという気はさらさらない」とH常任理事は言い切る。

3-2-2-3 付随的状況追加型

発話者の心情や行動を述部としている引用動詞である。上記の発話時における外的様態説明型(3-2-2-2)と同類とみなすこともできるが、あくまでも伝達者の解釈や観察による主観的な表現が多い。この型は引用文の後に如何なる動詞でも可能のようである。

- (42) 「戦争や原爆に対する考えが薄くなった」と朴さんは残念がる。
- (43) 「何だか温かくて居心地がいいんですね」と顔をほころばせた。
- (44) 念願の達成に「先生方や仲間たちに感謝の気持ちで一杯です。夢のよ

- うです」と喜びをかみしめた。
- (45) 「一石二鳥だ」と満足そう。
 - (46) 「5本は打ちます」と意欲を見せた。
 - (47) 高校生ら，若い世代による平和運動の広がりについては「行動する若者が育っている事を誇りに思う」として，人材育成に努める事を決意した。
 - (48) 「核兵器廃絶運動の先頭に立って進む」と決意を示す。
 - (49) H助教授は「積極性と若さには驚嘆する」とたたえる。
 - (50) 婦人は「今更そんなもの貰ってどうするの」とあきれているという。
 - (51) 「桃岩荘花にも変わりませんよ。どうぞお越し下さい」穏やかな声が，頭の中を駆け巡った。
 - (52) 「この敗戦を必ず次につなげる」と声をつまらせながら雪辱を誓った。

言葉を発する場合には同時に何らかの動作も伴う。その動作や表情は当然発した言葉の内容と連動している。逆に言えば，動作を表明する言葉を発しているとも言える。また言葉の内容はその心情が表に現れるのも当然である。そういう意味では言葉と動作や表情は切っても切られぬ縁であり，切り離す事はできない。

3-2-3 同一場面共存型

伝達者による発言がなされる第二場面では，第一場面での話者の発言や思考が引用文において再現されるわけであるが，この場合に引用内容とは全く関連性のない動詞が述部動詞となっている場合がある。つまり引用文は述部動詞にとって必須の成分とはなっていない。これらの引用文を，砂川(1989)は「事態共存型の引用文」とし，引用文に示される発言や思考と言う事態と，述部動詞によって示されるそれとは別の事態という異なった二つの事態が，単なる偶然の共存にとどまらず，それを越えた何らかの根拠のある結びつきによって同一場面に共存すると言う関係にあると述べている。(注10) 例えば，次のように「と」の後に内容とは関係のない動作が続くものである。これはあくまでも伝達者の観察によりつけ加えられたものである。

- (53) 「そういうやつらのために」と山本が中心となり一般公募合宿が行われた。
- (54) 「あれっ」と目を上げた。
- (55) 「書いてくれ」と鉛筆を持って来ました。
- (56) 「さあ、見るぞ」と見始めたんですよ。

(55)(56)は引用部分の言葉が引き起こす事態が述部動詞となっている。また、「どこか旅行したいな、と遠くを見つめてため息をついた」等のように全く関連性のない述部動詞が使われる場合もあり、これは小説などに良く使われる手法である。いずれも引用文を言いながら、または言った直後に行った動作を表現していると考えられる。それは引用文の発言内容が示唆する動作や行動である場合もあるが全く関係がない場合もある。小説等では、「と」で受けずに引用符のみの場合も多い。

(57) 「お待ちになりました？」

「いや、今来たところです」

紅茶を頼んだ後、私は大きな硝子窓に目をやった。 北村薫『夜の蟬』

(58) 「でも、梅雨で思い出すのはシュークリームですね」

円紫さんは面白そうな顔をした。 北村薫『夜の蟬』

次は第一場面の話者の意図が第二場面での聞き手に正確に伝わるためには、媒介となっている伝達者の補足、修正が必須な場合の例である。これは状況説明のために引用文が追加されたとも解釈できる。述部動詞は発話内行為を起こすための補足的説明とするよりも、補足的役割を担っているのはむしろ引用文の方だとも考えられる。例えば(59)は、容疑者が広尾署に自首したことが主題であって、「俺がやりました」は副詞句として自首した状況に臨場感を出すために補足して述べているとも解釈できる。

(59) H容疑者は「俺がやりました」と広尾署に自首した。

(60) 「署名しろ」と迫られたが拒否した。

(61) H社長は「オリジナルとは言いがたい」としてテレビ朝日に謝罪した。

上記(61)のH社長の引用の言葉だけではその内容を伝えるには不十分である。したがって伝達者が謝罪したと補足することによって状況がより正確に伝達されるわけである。「Hは謝罪した」という言葉の含む意味は、Hの具体的な発話内容までは言及していない。伝達者は発話内容の選択を自己の判断で自由に行うことができる。また、以下のように引用内容は同じでも、伝達者の状況判断に基づく説明や私情の介入等で第二場面での聞き手は全面的に左右されているのが分かる。

- ①「明日また来る」と言った。
- ②「明日また来る」と約束した。
- ③「明日また来る」と威喝した。
- ④「明日また来る」と慰めた。
- ⑤「明日また来る」とは言ったが…。

上記の例文では引用述部動詞が伝達文において重要な要素となっており、伝達者によって選択された引用動詞が引用内容を決定していると考えられる。伝達文は、伝達者の発話場面に全面的に帰属しているのである。

人は多くの場合何ごとかを言いながらそれと別次元の行為を遂行している。例えば「明日また来る」という発言は、発言することが意志の表明である。そしてこの発言は伝達文の述部動詞によって特定される。それはその発言がなされた場面と状況によって左右され、述部動詞を決定するわけである。つまり、この述部動詞の選択は伝達者の主観的な判断や評価が介在しており、伝達文の受け手はそれをそのまま受ける事になる。

遠藤（1982）は、話法は一方通行のようなものとして、次のように述べている。(注11)「話法とは、人の発話を伝達して述べる際の述べ方の事で、その原則は、伝達行為としての総和が第一の発話と第二の発話とで等しいこと、である。言い換えれば、理想的な間接化とは、第一の話し手の意図が第二の話し手という媒介者を通して第二の聞き手に正確に伝わるような変換・修正を指す。話法は、間接化はできても直接化の難しい、いわば一方通行のものだと言えるかもしれない。」

3-3 対話にみる伝達部分

次は、質疑応答とまではいかなくても、ある質問に答えているそのやり方を扱ったものの例である。

- (61) 問題をどう知ったかについては「知りません」と答え、「受験生に問題を伝達した者がいるか」については「おりません」と答えるなど、3行で疑惑を否定した内容のものだった。
- (62) 「可愛い子には旅させよ」という言葉の意味を問うと「良い子にしていると旅行に連れて行ってもらえる」という答えが返ってきたそうです。
- (63) 「なんで俺みたいな田舎者を」と洩るHを「昼間からビールを飲んでひざ詰で」と口説いたKは、後年Hの魅力を「明るさ、優れた直感、…」と書いている。

3-4 談話での伝達形式

ラジオの放送は視聴者の耳に瞬時に入ってまた消えて行く。トークショウやディスクジョッキー的な談話の場合はだいたいの設定はあっても一言一言を予め準備された原稿を読むわけではない。新聞の記事と違うところは即時性ととも言える部分である。日本語においては話し言葉と書き言葉との間には大きな違いがあり、書き言葉をそのまま話し言葉に持っていくと、不自然で奇妙なものになってしまう。音声によるニュースの報道には、談話やトークなどと違い、いくつかのパターンが決まっている。

3-4-1 ニュース報道

3-4-1-1 ニュース報道の型

ニュース報道には一定の型があり、二つに分けられる。一つは、主体（話者）を提示し、引用文をそのまま引用動詞で導き、内容補足を述部動詞で行う複文構成の文である。後節の述部動詞の主なものは「理由を説明しました」「理解を求めています」「意向を示しています」の類である。

- (64) H大臣は「…和解交渉に入らせていただく」と述べ、和解交渉に入る方針を公式に表明しました。
- (65) 厚生労働大臣は「厚生省は…考え方を整理して示したい」と述べ第一

回の和解協議までに国の見解を提出する意向を示しました。

(66) 大臣はH氏と会談し、「慎重にやって欲しい」と注意を促しました。

もう一つの型は、主題を「については／に関して／を受け／をふまえ」等で受け、次のように「コメントしています／述べています／考えを示しました」等の述部引用動詞で引用文を導く型である。その他「と否定的な意見を表明しました」「と注意を促しました」「と反論しています」などの述部動詞で引用文の内容をアナウンサーが補足要約して伝えるという形式がほとんどである。

(67) 国土交通省は現在の計画については「今までの料金水準で賄うことが可能だ」と反論しています。

3-4-1-2 「としています」と「ということでした」

引用文を提示して文末は、「ということでした」「という考えを示しました」「としています」など中立に報道する場合である。

(68) 「市民が自然と触れ合えるようにする」としています。

新聞記事の報道では述部動詞の種類が広くさまざまであったが、ラジオの報道では述部動詞が主に言語表現のカテゴリーに属するものばかりであるのが特徴である。これは、時間の拘束という点から短い時間に視聴者に公平に伝達しようとする姿勢からきたものだと考えられる。

3-4-2 会話における伝達の特徴

ニュースのような報道を目的としたものではなく、いわゆる会話と呼ばれるものについて述べる。つまり、一対一の対話、またはインタビュー形式のもの、2、3人による自由な会話を取り上げた。この中には政治的な話題を単なる報道ではなく、アナウンサーがニュース記者にインタビューをするという形式のもの、むしろニュース解説に近いものも含まれている。文頭の(1)(2)(3)で取り上げた例をここでもう一度伝達部分に焦点を当てて考察する。ラジオ放送であるため引用符の使用が見えないが、引用符を挿入した形で記す。

加藤さんは「15日だけは絶対に避けて欲しい」って言っているんですね。「15日に行くと、今までの交流がみな駄目になる」って言う風なことを言うんですね。「いろんな形で日本の外交はおかしいぞ」という形でバッシングが来るのが予想されますよね。「日本政治は大変革の時にある」と言うので、そっちの方に集中するエネルギーが削がれてしまうんじゃないか」とね、山崎さんあたりが言っていますよね。加藤さんだって「絶対15日は避けてくれ」って言っているけどね。

基本的に述部動詞は「とやっている」と「と言う」の引用動詞を使用しているが、特徴的なのは、「って言う風」や「って言ってるんですけど」と伝達者の側に取りこんだ主観的な言い方をしている。その他の例をみると、

- (69) 「夏は海が一番です」というようなことを言いますよね。
- (66) 「自然の姿を残して行くのが私たちの勤めです」と言う風におっしゃっています。
- (67) 「樹齢数百年」と言う風なニュースも出ましたよ。
- (68) 「ここまでくると勝てる自信はなかった」って、こう言う風に言ってますけどね。
- (69) 「やめなさい」って言う風なことになった。
- (70) 「好きなんです」みたいなこと言って。
- (71) 「ともに天国で会いましょう」と言うことで。
- (72) 「10年ぐらいはやっていきたい」と。

「と言う風なこと／と言うようなことを言っているんです」「言うことなんです」「と言う風に言っています」などのような伝達者側の“ぼかし表現”が目立つ。また、話し手である主体に関しても明確な表現を避けて「山崎さんあたり」や「加藤さんだって」(2)(3)という言い方をしている。

日本語の特徴として、相手に配慮するあまり物事をはっきり言わない、断言しないということが言われている。伝達の場合も第三者が言ったことであり、自分の言ったことではないのだからはっきり断言することは憚られる。相手尊重と言うよりも、むしろ責任逃れとも取れるような、「…って言うふう

なことを言っていた」と言うような不確かな伝聞形式が使われる。しかも、自分がその場に居て実際にその言葉を聞いたにも拘らず、「…というようなことをおっしゃいましたよね」とお伺いをたてたり、念を押して主体の心情や感覚を客体化する。自分の発話に「私はその場で聞いてはいたが、間違っているかもしれない。だからはっきり断言はできないが、多分こういうことだと思う」という曖昧な婉曲表現にして、不確かな断定を用いることによって相手を敬う心、つまり相手に対して不躰な態度を和らげるという効果を期待していると言える。これは、第三者の感情表現等を自己の表現「私は行きたい」とストレートに心情を表現する言い方と区別して、「彼女は行きたいそうだ」「行きたがっている」「行きたいようだ」と表現するやり方に似ている。他人の自分が他の人の心情や考えまで入っていくことは憚られるという「内」と「外」の考えにも通じる日本語の特徴であろう。

談話の中では、ある特定の人がはっきり言ったことをその場で聞いていたにもかかわらず、別の場面で第三者に伝える場合には“ぼかし表現”を使って婉曲に言う言い方の多いことに気がつくが、この現象は主体が特定できない一般的な場合には特に顕著である。

- (73) 「全面的に増える」というようなことが言えます。
- (74) 「子どもは自由に良く育てます」というような自由主義者がいます。
- (75) 「危ないじゃないか」というふうに用心して。

同様に、引用句を正確に伝えず、直接的でない言い方に「とか」がある。

- (76) 「全部生放送だった」とかさっきお話しがありましたね。

「…という」に関しては、日常会話の中でも、自己紹介で「私はHです」と自分を断定せずに、一般化した表現「Hという者です」と名乗る場合がある。これはHで表わされる者、つまり、‘そのような名称を持った者’という意味から、Hの個別的な特殊状況ではなく、普遍的な一般化した形でHを捉えているのである。(注12)

次にお互いの会話のやりとりを表現したものについては、会話の流れから、誰が「…」と言って、と繋げるのが一般的である。

次はカメラマンHとの対話で、聞き手はHの話しを聞いて、Hの言った内容を復唱し、確認している。

(77) 私も撮って貰ったんですよってお母さんがおっしゃって、娘さんもってということもありますってことですね。

(77)は聞いたものの文字化であるため、引用符の個所が不明であるが、引用符をつけて表記化すれば次のようになると思われる。

(77) 「私も撮って貰ったんですよ」ってお母さんがおっしゃって、「娘さんも」ってということもありますってことですね。

(78) 「ミスありますか」って言いましたら、「一度もない」っておっしゃいました。

(79) 中内オーナーが王監督と面談して、「契約を無期限延長したい」と、こう王さんに言ったんですよ。王さんは「自分だけ身分が保障されるっていうのは時期尚早だ」ということで即答を避けているわけですよ。

その他、全く引用動詞と関係ない動作動詞等が述部動詞となっている場合で、(3-2-3) 同一場面共存型に属するものである。

(80) 「もう年だね.疲れたよ」と周りの人にひそかに漏らしているということも聞いております。

また、日本語の話し方は、話し手と聞き手が話し手の意思を理解し、聞き手はそれに対して新しい意見を表明するというわけではなく、一緒に会話そのものを構成していくという見方をするのが妥当である。伝達文においても第一場面で聞き手となった者が、話し手の意思を汲み取り、状況判断のもとに自分で再構成した話をその場を共有した者として第二の場面で第三者に伝える、そこでまた共有の場を構成するといえる。「話法」つまり、伝達の形式には以上のように日本語の特徴が顕著に現われている。

4. 日本語学習者の報告文の分析

日本語学習者は、伝達文の形式の中に上記のような日本語の特徴をどの程度習得し、活用しているのであろうか。実例をあげて考察していく。

日本語中級学習者に課したプロジェクト・ワーク活動で、各学習者が日本人にインタビューを行い、その結果の口頭報告を行った。発表者はそれぞれインタビューをして、直に聞いてきた内容を皆の前で発表するわけであるから、伝達の文を使うことになる。形式は、初めにインタビューをした相手のプロフィールを述べ、それから本題に入る。発表を行った者は7名で、全員通常の日本語のコミュニケーションには全く支障のないことはインタビューを受けた日本人被験者からの報告で確認されている。特に、この7名は個人的な癖や弱点は多少あってもだいたい同レベルの日本語能力を持つ学習者である。インタビューの内容は『女性問題』と題して、各自が準備した質問を日本人に聞いた、その報告である。報告者はどのような引用動詞を用い、述部動詞には何を使っているのか。以下の資料は発表を録音して文字化したもので、引用符は筆者の判断で明らかな場合は文字化の段階で付した。但し、伝達文の中での引用文の部分が不明瞭な場合はそのままにした。報告者7名をS1～S7とし、インタビューの相手をA B C D E Fとする。

4-1 伝達形式の型の固定化

日本語学習者の7名中6名(S1～S6)が、報告の全文を基本的に①私の質問は「…」、答えは「…」、②「…」と質問して、「…」と答えました／言いました、の「質問」と「答え」のパターンに定型化した型で構成している。もう一つは③述部動詞のない引用内容のみの提示で終わっているものである。いずれも直説法の形式であり、これは初級段階で学習した文型であり、その型に依然として留まっているということは、中・上級の目標である滑らかさには到達していないということになる。S7のみが文全体を間接話法的にまとめている。しかし、それもある一定の型から脱していない。以下学習者の文の中から抜粋した例文について考察していく。

4-2 「質問は…」 「答えは…」 の定型

- (1) 質問は「一般に日本の女性は、結婚後仕事を辞めますね。どう思いますか」。答えは、「そうします」。彼の奥さんは高校の先生だったから、一年間休む事ができました。S 1
- (2) 私の次の質問は「奥さんは、どうしてもう一度高校に勤めましたか」。その答えは「お金がなかったから」。S 1
- (3) 次の質問は「あなたの今の職場で男性と女性の差別はありますか」。その答えは「あると思います」。S 1
- S 1の場合、「次の質問は」と質問文を畳み掛け、それに対して「答えは…」という形式から脱していない。しかも引用文の文末は述部動詞がなく、引用文のみである。語彙や内容に関しては高度であり、伝達内容の把握も十分であるにもかかわらず、伝達部分、つまり語法が非常に稚拙である。最後の部分では対話形式の表現がうまく出来ずに以下のように終わっている。
- (4) 最後の質問は「日本の社会は男性が優位で女性の立場は低い。どう思いますか」。その答えは、あまり答えません。「そうですね、貴方はどう思いますか」そのあと私の意見を言いました。S 1
- (5) 先ずBさんに「貴方の意見では、日本の社会はどのぐらい平等だと思いますか」と聞いて、彼女はちょっと微笑して「あまり平等じゃない」と答えました。そしていろいろな事を説明してくれました。S 2
- (6) 私はBさんに「女性問題の法律で何が役に立つと思いますか」と聞きましたが、彼女は「法律はあまり役に立たないんです」と答えました。S 2
- (7) 次の質問は「女性は結婚したら家庭に入って、専業主婦になった方が良いと思いますか」。Cさんの意見は「自分の考えは仕事したいんですが、結婚したらしょうがない、仕事を辞める方が良いと思います」と答えました。S 3
- (8) 初めに「Dさんは何年図書館で働いていらっしゃいますか」と質問しました。「27年ぐらい」と教えてもらいました。S 4
- (9) 「お子さんがいらっしゃいますか」と言いました。Dさんは「はい、男の子が一人いる」と言ったので、私は「お子さんはおいくつですか」と

質問しました。S 4

- (10) 次の質問は、「結婚する前からしていた仕事を子供さんが生まれてからも、そのまま続けましたか」でした。答えは「はい、続けました。休暇は、昔は産前産後合わせて6週間でした」。私は「この頃はもっと良いでしょうか」と言いましたら、Dさんは「この頃はあまり関係ないから覚えていない」と答えました。S 4
- (11) 最初の質問は「最近の日本の女性は家に居ないで、外で働きたいと思っていますか」です。E先生が答えてくださったのは「いろいろな理由がありますね。例えば、経済的な理由です。また、自分の力を生かしたいからです」。S 5
- (12) 次の質問は「大学では男女差別がありますか」。E先生の答えは「あまり分からないですが、あると思います、あると思っています」。S 5
- (13) 私は「お子さんが小さい時にお母さんが仕事をするのは良い事と思えますか」と聞きました。Fさんは「良い事かもしれませんが」と答えました。S 6

上記の例でも分かるように学習者の例文には、母語話者の伝達文の実例で見られるような多様な述部動詞の使用が全然見られず、引用述部動詞の貧弱さが目立つ。(資料参照)

4-3 間接話法的手法

学習者の固定化は「と言いました」「と答えました」等の動詞で引用文を導いている点であり、話し手の内容をそのまま伝えているという点では直接話法と言える。それに対して、次の(14)(15)は間接話法的に引用文をまとめている例である。「教えてもらいました」「頼みました」と引用文の意図を伝達者が汲み、述部動詞で補足するやり方である。これは母語話者に見られた伝達形式(3-2-2-1)と同じものである。

- (14) どうしたらいいでしょうね。良い方法があったら教えてくださいと頼みました。S 7
- (15) 学校の先生方は一年間の育児休暇があるとも教えてもらいました。育

見休暇とは、生まれた子供が一才になるまで休みがとれるということですね。S 4

(16) 公務員は国のために働きますということです。S 4

例文(14)は話し手Hが独身なので結婚相手を探すのに良い方法があったら教えてくれとS 7に頼んだということである。(15)(16)の文末の「ということです」は話者の伝達の形式(3-4-1-2)を取り入れて成功している例である。

次のS 7による(17)(18)(19)は間接話法的にまとめられている例である。初めにインタビュー相手Gのプロフィールを述べ、Gさんは、「と話しました」「知っています」「ことになっています」という形式で説明している。

(17) 差別は女性の教育レベルの問題ではないと話しました。S 7

(18) なぜ女性が結婚しないかと言う原因は、今の女性は楽しい独身生活を失いたくない気持ちが高まっているのをGさんは知っています。S 7

(19) Gさんは、将来結婚してどんな家庭にするかは今は決められません。奥さんと一緒に決めることになっています。S 7

4-4 「思います」と「思っています」の混用

「と思う」に関しては、「と」(2-4)の項で、引用文の表わす意図や心理状況を表わすということを述べ、本論ではインタビュー報告における発話の引用であるため「と言う」に限るとした。しかし、学習者の報告文では、「思います」「思っています」を発話内容の引用に使用している例が見られたため、伝達文の引用動詞としては適切ではないが取り上げることにする。

次の例文には、「思う」「思っている」の使い方が混同しており、表記の面で引用符がつけにくい。

(20) 「子供のために一番良い環境はどう思いますか」と私は聞きました。学校に入る前は子供は両親と触れ合う時間はすごく大切だと思います。日本では男性はもう少し現実的に考えた方が良いと思います。仕事をする事は良い事です。子供と触れ合う時間も良い事です。だけど日本のシス

テムでは両方はあまりできませんと言っていました。しかしこのシステムはちょっと変わりましたと言っていました。S 6

(21) 女性の問題は社会の主な問題の一つだと思います。S 7

(22) 次の質問は結婚の基礎的な年齢は一般に何歳と思いますか。答えのポイントはあまり若い時に結婚しない方が良いと思います。と言うのは、やはり、女性も自分を確立してからの方が良いと思います。S 4

(20)(21)(22)は自分の意見か、インタビュー相手の意見なのかわかり難い。主語の省略がなされる日本語では「と思います」の場合の主語は、一般に話者である。従って上記の例では話者である伝達者が思っていることになる。「太郎は合格すると思う」が話者の思いであるのに対して「太郎は合格すると思っ

ている」は太郎自身の思いであることから分かるように、報告文ではインタビュー相手の気持ちを言うのであるから「思っています」とすべきである。特に、(20)のように一つの引用文が長くなると、自分の発話なのか、相手の発話か分かり難い。話者が誰なのか明瞭ではないという結果を生じているのは「思っています」「思います」の使い分けの不充分さに起因している。(22)の例では、「と言うのは」などの中級以上の日本語の言いまわしを習得しているにもかかわらず、「良いと思います」という主語の分らない文末で終わり、話法の形式については、アンバランスな習得をしている。

S 5は例文(12)において、「思います」を「思っています」と言い直しているが、これは自分の発話が文法的に正しくないと気づいて訂正をしている状況が観察される。学習者自身にも会話の進行中での混乱が見られるが、全般に両者の混同が見られ、学習者にとっては習得し難い日本語のもう一つの問題点である。

(23) Fさんの時代では、男はいつも仕事して女の人はずっと家にいたかったです。今の女の人はずっと家の仕事はしたくないと思っています。

(23)は語法的には正しい使い方である。ただ、「思っています」という言葉を他者に関して使う場合には話者との間に距離的に何らかの相関関係があると思われる。「太郎は合格すると思っ

判断の元で、他者の思いを自分に取り込んで想像して話すのであるから、話者と距離の近くない他者の心情に関しては使われ難いのではないだろうか。ごく内輪でしかも確信的なことに関して主観を交えて発するものと考えられる。報告文での乱用は相応しくない。

- (24) E先生は、男女性差別があると思っています。でも、主婦が外で働く方が良いと思っています。奥さんの仕事はかなり忙しいですが良い仕事だと思っています。S 5

(24)では前文「と思っています」に統一している。しかし日本語母語話者の談話例のように、むしろ「言っています」「言いました」を上手に使う方が好ましい。

4-5 引用文のみのシナリオ的伝達

引用述部動詞がなく、引用文のみの発話は伝達文としても奇異に感じる。

(1)(2)(3)の「答えは」で導かれた引用文は、話し言葉の場合には、文末に「です」または述部引用動詞をつけるべきである。これは述部引用動詞の選択が上手にできないことが要因で非用になっていると思われる。

- (25) 嫁と姑の問題について聞きました。「どうして、いつも夫の両親ですか」。「それは伝統的な問題です」。どうしてか説明できませんでした。「Cさんの場合だったら」。「それはできません。夫と一緒に住みたい」。S 3
 (26) 「オフィス・レディーの場合は結婚したらどうしますか」。「結婚する時には、一般的に仕事をやめて主婦になります」。「専業主婦になった方がいいですか」。「自分の考えでは仕事したいんですが、結婚したら仕様がなと思います」。

4-6 会話形式の伝達表現文の難しさ

次は対話形式の表現を伝達しようとしたS 4の例であるが、インタビュー相手と伝達者のどちらの意見なのか判断し難しい。S 4は「教えてもらった」「ということです」等な間接法的な使い方伝達形式に成功している面を見せている一方、他の部分では習得途上の不完全さが見られる。

(27) 次に、ちょっと難しい質問をしました。その質問は恋愛結婚しても夫婦ザイサン契約している方が日本で多いでしょうかと言ったら、Dさんは、その夫婦ザイサン契約のザイサンが分かりませんでしたので、漢字を見せた後で答えました。夫婦財産契約は本当に珍しいと思います。そしてDさんは結婚する時そこまで考えていなかったかもしれませんと言いました。S 4

学習者にとっては伝達文の形式が習得し難く、そのため「質問は」「答えは」という応答形式にほとんどが終始しているということが分かったが、(27)の例は、第一の場での状況を表現するため間接的言い方への努力が見られる。目標言語に近づく途上の中間言語としてみることが出来る例である。ただ、下線部「思います」の引用内容はインタビュー相手であるDのことかS 4のことかがわかり難い。

7名の中級学習者は、それぞれ別々の機関で日本語の初級段階を修了してきており、異なった日本語学習の背景を持っている者たちである。それにもかかわらず伝聞の形式が同じくパターン化しているということは、日本語の語法の中でも伝聞の形式は最も習得し難い部分だと言うことができる。今まで日本語教育の語法の中で習得し難い用法として伝聞の形式がとりあげられたことはあまりなかった。

5. ま と め

中級以上になると学習者のニーズが細分化され言語教育の範囲が広がる。従って学習項目も多岐に渡り、教室内での教育にはかなり工夫が必要とされる。学習者には、初級段階で学習した基礎を土台に、自分で習得していく自学習での効果が期待される。また、目標言語が話されている社会で生活していればその学習効果も自ずと上がるものである。ただ、今回の調査分析を通して伝達形式に関しては未習部分に共通点が見られ、習得がかなり困難であることが分かった。自分が聞いたことを別の場面で全く内容を知らない別の

人に伝達するという伝聞形式は自力では習得し難い部分がある。そこには、日本語の用法に共通したいくつかの原因があげられる。

まず、日本語の伝達形式は多様であり、その用法に関しても形式上の規則や縛りが無い。例えば、引用符で囲まれた引用内容が紹介されたかと思うと、それに引き続き伝達者による内容に関する解釈や注釈が述べられている。それは話し手の意向なのか伝達者の心情なのか判明しにくい場合が多い。

次に、日本語では直接話法と間接話法の区別をすることは不可能であると言える。むしろ、伝達者がどの程度第一場面の発話に感情的に関与しているかという度合いが問題となっている。第二場面での聞き手は、伝達者を通して伝達内容を聞くこと自体が常に間接的であると認識している。Aが言ったことをBが伝える場合には必ずBの色に染まっているということを自然の成り行きで当然であると解釈しているのである。ただ、一般引用動詞の「言う」「述べる」等は、伝達者が伝達内容には無関心であるということを表明している。従って、「言う」「述べる」等の内容に無関心の一般動詞を使う場合は、例えば「Aさんは『・・・』と言いました」という伝達文は、心情を含まない突き放した言い方だと敬遠され、「食事の前には『いただきます』と言います」と言う慣用句に使われる場合にはぴったり納まるのである。これらの引用動詞がニュース報道や私情を含まない報道文に使われる所以である。

第三番目には、「と言う」という中間的な動詞で引用内容を受けることによってまず事態を客観化する。次に、第一場面での発話者の内容を聞き手である伝達者は自分の立場に取り込んで伝えようとする。ここに、伝達者の観察や心情が第二の場面での発話時に大いに関与することになり、しかも、その関与の仕方が伝達者の立場によって多様な述部動詞として表現されるのである。

このような伝達の方法には、日本語の特徴の凝縮した要素が多く含まれている。外から傍観的にものを見るのではなく、事態の中に入って自らの目で事態と自分の関係を見ようとする。これは日本語における文末表現の多様性として表われている。この点は中・上級の学習者にとっても習得し難い点であろう。また、目標言語が話されている社会に生活していても自学習のみでは習得し難い部分ではないかと思われる。

今回のインタビュー報告においては、日本語特有の心情も含めた伝聞形式の習得し難い部分を、学習者全員が既習の文型や語彙で間に合わせるという、いわゆる非用となって現れたと言えるのではないだろうか。

日本語の伝聞形式の分析の結果を踏まえて、学習のための具体的な方策を立て、教室内での feed back を行い、日本語教育の指導にあたることが必要である。日本語の更なる分析と学習方法の方策を考案することが今後の課題である。

資料

学習者の伝達文に使用された述部引用動詞

述部 動詞	聞きました 質問しました 質問は「…」	答えました 答えは「…」	言いました	思います	思っています	その他間接的表現
S 1	9	8	1	0		教えました 1
S 2	5	3	1	1		0
S 3	5	3	9	2		0
S 4	9	7	3	3		教えてもらいました 4 ということです 2
S 5	2	2	2	1	5	教えてくれました 1
S 6	8	6	11	5	2	0
S 7	0	1	1	2	2	たのみました 1 教えてくれました 1
合計	38	30	28	14	9	

注

1. 日本語教育辞典 1982 大修館書店 p205
2. 寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版 p258
3. 日本語教育辞典 上記
4. 日本語文型辞典 1998 くろしお出版
5. 森田良行 1995『日本語の視点』創拓社 p174
6. 砂川有里子 1989「引用と話法」『日本語と日本語教育4』明治書院 p357
7. 砂川有里子 上記
8. 『似た言葉使い分け辞典』1991 創拓社 p30
9. 国立国語研究所『分類語彙表』秀英出版 p134
10. 砂川有里子 上記 p364
11. 遠藤裕子 1982 「日本語の話法」『言語』Vol.1, 11, No.3
12. 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店 p106

参考文献

1. 井上和子 1989 日本語小事典 大修館書店
2. 遠藤裕子 1982 日本語の話法『言語』Vol.11 No.3

3. 鎌田修 1983 日本語の間接話法『言語』Vol.12, No.9
4. 砂川有里子 1989 引用と話法『講座日本語と日本語教育4』明治書院
5. 寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
6. 森田良行 1995『日本語の視点』創拓社
7. 『日本語学』1988 9 Vol.7 特集「引用」
8. 『日本語基本動詞用例辞典』大修館

テキスト

1. 『みんなの日本語 I・II』1998 スリーエーネットワーク
2. Osamu & Nobuko Mizutani, 1977, An Introduction to Modern Japanese, Japan Times